

発表者は、5月25日月曜7限の授業において、「フランス革命におけるフェデラリズムの言説」というタイトルで発表を行った。以下はその報告書である。

[1] 問題関心

発表者の問題関心は、EUの時代である現在においてもなお中央集権的思考の強い、フランスの在り方の是非を問うというものである。そのために、発表者はまず中央集権的な思考とはどのようなものなのかの理解を行おうと考え、フランス近代国民国家の発端であるフランス革命に遡り、中央集権と、それに対置されるものとしてのフェデラリズムを考察している。

[2] 発表内容

発表の内容に関しては、初回であったため、歴史学と言語学の異分野融合という視点でどのようなことを行っているのかを紹介することにつとめた。具体的には、

- 1: フェデラリズムの言説の内容確認
- 2: 語彙の分類と頻度分析
- 3: 類義語・対義語・同義語との関係性で見るフェデラリズムの位置づけの把握

である。

1 に関しては 調査時期初期[1789-1792]の肯定的使用 → 調査時期中期[1792-1794]の否定的使用 → 調査時期後期[1794-1795]の語の使用の否定 という言説の変遷について説明した。

2 については 形態、意味、登場時期でフェデラル系列の語を A,B,C,D の四つに区分し、頻度を折れ線グラフで示した。これにより、初期の肯定 A[fédération 他]から中期の否定 D[fédéralisme 他]への移行、そして後期の頻度の大幅減少を示した。

上記の作業を通じて、平和な時代に安堵し、危機の時代に恐怖し、そして、危機への過剰反応を反省する、という革命家たちの心性を描くことができたと思う。

3 は現在実行中の作業であり、具体的な内容には踏み込めなかった。

[3] 質疑応答

上記の発表に関する質問や指摘の中で、重要と思われたのは以下の二つである。

- 1: 国家創設の時期においてフェデラリズムが否定の意味となるのは、当然ではないか(前田洋平さん)
- 2: 言説の研究によって、結局何があきらかとなったのか(古田高志さん)

これらに対し、発表者は以下のように返答した

- 1: フェデラリズムという言葉が否定の意味のみ有する状況は、けして当然ではない
- 2: 今回は、具体的にどのような言説が存在し、どう移り変わるのかというファクトの追及に専念した。

問題関心と結びつく具体的な分析は今後の課題である。

1 は、発表者の説明が不足していたため、何が発表者のオリジナリティーなのかをうまく伝えられなかったため、生じた指摘だと思う。と同時に、発表者の応答ではまだ弱いと思われるため、考察を深める必要性を感じている。2 についても同様で、具体的な分析を一層蓄積しなければならないと考えている。

今回の発表で、発表者は自分の急所を的確に突かれたと感じた。その意味で、有意義であったと思う。